

---

# 俺と彼女の異世界放浪記

音無 語

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と彼女の異世界放浪記

### 【Nコード】

N6704J

### 【作者名】

音無 語

### 【あらすじ】

少年と少女が世界を渡る…その時世界の運命が動き出す…世界をめぐる中で少年と少女は何を想い何を考えるのか…少年と少女の行き着く先にあるモノとは…。多重作品クロスファンタジー今開幕！！（なんだか重い感じで始まりましたがシリアス30%コメディ70%位で行こうと思います。と言うか作者があまり真面目では無いので適当に書きます。色々な作品を登場させていきます。それにより登場人物達のイメージまたはキャラが崩れることが在ります。それが嫌な方はお読みになりません様お気をつけ下さい。）

序章・巻「闇の中での追想」(前書き)

初作品です。

色々至らないと思いますがお気になさらずゆるりとお楽しみ下さい。

生暖かく見守って下さい。

序章：巻「闇の中での追想」

少年が真っ暗な空間に浮かんでいる。

何処が上で何処が下か、

落ちているのか浮いているのか、

地面があるのかさえ分からない……

「ん……何だ此処は？」

「暗い……何も見えない……」

（確か桜花と学校から帰って居て……）

少年は段々と頭がはつきりとして来た様だ

（そうだ！確か信号を渡ろうとしたらトラックが突っ込んで来て……）

「桜花！！桜花居ないのか？！居たら返事をしてくれ！！」

少年は何も見えない暗闇に叫んだ

（くそ！！何もみえねえ！！）

「……んっ……」

小さいが近くで声が聞こえた

「桜花!!桜花なのか?!!」

少年は必死に声のした方向に向かって進もうと足掻いた

「進んでんのかコレ?!」

すると少年の指先にやわらかい何かが触れた

少年はその感覚を頼りに触れた物を手繰り寄せた

「桜花!!しっかりしろ!目を覚ませ!!」

「……んっ椿、ウルサイ……もう少し寝かせて……ZZZZ」

少女は眠っていた様だ

少年が心なしか震えている……

「……起きろ!!このアホ女!!」

「・・・誰がアホだって？・・・」

少女の手は正確に少年の首に掛かっていた。

「いついや（汗）気のせいだよ桜花さん、イヤ、桜花様  
私がそんな事を言う訳が無いでしょう・・・」

少年は冷汗を垂らしている

「・・・今回だけは許してやろう・・・次は無いぞ・・・」

少女はそう言って手を放した

少年の首にはくつきりと手形が付いている

「ま、まあ今はそんな事より周りを見てみるよ・・・」

「周りだと？何も見えないではないか・・・ん？何も見えないこと  
が異常なのか・・・  
セイどうなっている？」

「俺にもわかんねえよ・・・気がついたら此処に居た・・・桜花、  
此処に来る前の事覚えてるか？」

「此処に来る前？確かいつも通りと帰っている最中に椿トラックが私達に向けて突っ込んで来た所までは覚えているぞ。」

「桜花もそこまでか・・・ホントに此処は何処なんだ？あの状況で生きているとは考え辛いのだが・・・天国とも地獄とも思えないしな・・・」

少年と少女がそんな事を話していると突如辺りが光に包まれた

序章・忒「神との対面、そして異世界へ」(前書き)

書き終えてまず思ったのはこの回いらなくねえ？

てな漢字で始まる物語です。

無駄に文章長いです。

それでもよい方はどうぞ。

序章：貳「神との対面、そして異世界へ」

光が段々収まっていきそこには

「・・・なんだ此処？」

「・・・確かに・・・暗闇から移動したのは善いのだが・・・」

「何だよ（なのだ）この光景は！」

少年と少女が目を開けるとそこには真っ白でフワフワした地面と明らかに地上には存在しないであろう空を飛ぶ魚や浮かぶ動物が居た

「何で魚が空飛んでんだよ！！あの馬とか浮いてるし羽あるし！！あれがペガサスって奴か？！神話上の生き物だよなペガサスって？！」

「落ち着け椿、そんなに騒ぐな・・・うるさいぞ・・・」

「イヤ、何でお前そんなに冷静なんだよ！！魚や馬が空飛んでんだぞ！！明らかに異常な光景だろ！！！」

「分かっている、コレでも意外と混乱しているのだよ、だが先に現在の状態を把握する方が先だろ？」

「っ！！そうだな・・・わりい・・・ウシッ！！落ち着いた。あり

がとな桜花!」

そういつて少年は明るい笑みを浮かべた

「いつもの事だろ?お前が混乱していたり焦っていたら私が止め、逆に私が混乱したり焦っていたらお前が止める。今まで通りの事をしただけだよ。」

少女も薄い笑みを浮かべながら答えた。

「しかし、ホントに此処は何処なんだ?」

少年と少女が互いに落ち着いた所に何処からか声が聞こえて来た

「此処は天界じゃよ。」

「誰だ、何処に居やがる、姿を見せろ!」

「……椿!!後ろだ!!」

「っ!!」

少年はその場から飛び退き少女の隣に移動し、半身になりながら腰

を少し落とし拳を軽く握り何が起きてても対処出来るよう身構えた、それに対し少女はただ立って居る様に見える、だが微かに上半身が揺れ目つきも鋭くなっていた

「そんなに警戒せんでくれ、今姿を現すからのう」

少年と少女はそれに無言で答え少しだけ警戒を緩めた

そして、光が集まり人型を形成する

光が収まりそこに立っていたのは長髪で長い髭をした老人だった

「やれやれ、まだ警戒は解いてくれんかの？」

「・・・あなたは何者ですか？」

老人が尋ねると少女がそう返した

「わしは神じゃー!!」

「・・・椿、携帯持ってるか？このご老体を鉄格子の付いた病院まで移送しなくては。」

「待て、今探す。」

「待て待て、本当の事じゃ信じてくれ。」

「……」

少女と少年は可哀相なものを見る目で老人を見ていた

「そ、そんな目で見るでない！……どうしたら信じてくれるんじゃない？」

老人は泣きそうである

「そうですね、初めから疑って掛かるのは失礼でした。では、私達のプロフィールを当てて見て下さい。」

「そんな事で良いのか？」

「はい、ただし正確に当てて下さいね。少しでも間違っていたらその時は信じません。ああでも安心してください、良い病院を知っているのでご紹介します。最もそのお歳で入られたら死ぬまで出られませんかね（ニヤツ）」

少女は怪しい笑みを浮かべた

「（ゾクッ）わ、分かったのじゃ。だからその笑みを辞めてくれ。」

「これは失礼いたしました。では話していただきましょうか？」

「ふう、ではまず名前からじゃが、おぬしは「夜裂よれつ桜花おうか」それから、そこでまだ警戒を解いてくれて居ない少年は「蒼真そうま椿つばき」じゃな。そして2人とも幼馴染で経歴も一緒だな、何じゃ誕生日も一緒に7月7日はないか。後はその界隈の不良たちにも有名じゃの「狂くる神かみ」と「静神しづめがみ」とはな。」

「そんな事は少し調べれば分かります。他の事を他人が知らない様な事をお話下さい。」

「わかつとる、そうせかさんでくれ。・・・ふむふむ、ほほう。お前達は夜裂流鼓舞術と蒼真流古武術の使い手で、2人とも両親が死んでしまっているのか。しかし、どちらにせよ2人とも本当の両親では無かったのか。と、これくらいで良いかの？」

「分かりました。あなたの事を信じましょう。私達が引き取られたのは赤ん坊の頃ですからその事を知る人は両親と私達だけのはずです。親戚は居ませんしね。椿、大丈夫でしょう警戒を解きましょうか。」

「ん、了解だ。」

そう言つて椿は構えを解いた

「ふうやっと信じてくれたか。それで本題に入りたいのだが良いかの？」

「はい、大丈夫です。」

「俺もオツケーだ。」

「それでは、まずはすまんかった!!」

「「??」」

神は土下座しそうな勢いで2人に対し謝ったが2人は訳が分からないようだ

「何故謝るのですか?」

「イヤ、それなんじゃが・・・おぬしらは死んでここに来たのは理解しておるよな?」

「おう!トラックに轢かれて死んだってのは分かってるぜ。」

「・・・それ、ワシのミスなんじゃよ・・・」

「・・・どういことでしょうか?詳しく説明をお願いします。」

「いやのう、さっき部屋で書類整理してた時に間違っておぬしらの書類に死亡の判子押してしまっただのう・・・慌てて消そうとしたんじゃがその時にはもうおぬしらが死んでしまった後でのう・・・じやからスマンかった!!!!」

「……ジジイ……！！！！貴様殺してやる！！！！そこになおれい！！！！」

「ヒイイ……！！」

椿は神に襲いかかるうとしたが

「落ち着け椿。」

桜花が止めた

「そ、そうじゃ落ち着いてくれ……！」

「何だよ桜花！！何で止めるんだよ！！お前はコイツが憎くねえのかよ……！」

かに思えた

「違う。椿……ただ殺すのは生ぬるいと言っているんだ……恐怖と苦痛を最大限に味合わせた中で殺すの位しなくては私の腹の虫は納まらない（ニヤツ）」

「……そうだな（ニヤツ）」

「ヒッヒイイ~~~~!!!!た、助けてくれ!!!!!!」

「うん、無理!!!!」

.....

「ちっまだ腹の虫がおさまらねえ・・・」

「私もだ・・・だが先にこれからの事をコレに聞かなくては。オイ、いつまで寝ている。さっさと起きろ。」

ドスッ!

桜花は足元に転がっていたピンクと白の混ざった変な物体を足で蹴った

「ギャッ!!!!も、もう許してくれ・・・」

「ならば、さっさと話せ。私達を此処へ呼んだ理由は何だ?ただ事

故で死んでしまっただけならばほつつて置けば良いはずだ。」

「確かに、そうだな俺なら確実に見なかったフリをするだろうからな。何か用事があって呼んだんだな？一体、何のようだ？」

「むう、それなんじゃが・・・おぬしら転生してみないか？」

「何故だ？そんな意味があるのか？むしろそんな事が出来るのか？」

「うむ、転生自体は出来る。そして転生させることの意味だがおぬしらの死はワシの完全なる不注意から来たモノだ。その為、世界にはおぬしらの死が予定されていなかった、おぬしらの魂が輪廻の輪からはずれてしまったのじゃ。輪廻の輪から外れた魂は消滅する他無い。わしのミスで魂を消滅させてしまつのは忍びない、じゃから転生させ新しい輪廻の輪を形成しようと言うわけじゃ。」

「・・・分かった。その話からすると転生先は元の世界にすることは出来ないようだな？」

「うむ、もう既におぬしらが元居た世界では修正が働いてしまつての、おぬしらを新しく転生させてしまつと世界自体が自壊する恐れがあるのじゃ。だから別の世界へと転生させる事となる。」

「その世界は選ぶ事が出来るのか？」

「選ぶ？おぬしらのいた世界にあったライトノベル小説や漫画、アニメとかの世界と言う意味か？それならば問題は無いはずじゃよ。」

「ああ、前に呼んだ小説の中に面白そうな世界が在ったからな。そ

の世界へなら転生しても悪くない。(ニヤツ)「

「・・・桜花、それは俺が前に貸した小説の事か？」

「ああ、あの世界ならば私達も楽しめるだろう？」

「・・・確かにそうだが、俺は生きていける自信が無いのだが？」

「フフツ、椿は心配性だな。私達なら大丈夫だよ。」

桜花は椿に笑いかけた

「はあ、まあ仕方ないか。桜花は一度決めたら聞かないから・・・付き合うよ。」

「流石は椿だ、それでこそ私の相棒だよ。」

椿は疲れたように言い、桜花に笑いかけ桜花もそれに笑顔で答えた

「決まったかのう？」

「ああ、私達は『とある世界の禁書目録』の世界に転生する。」

「そうか、その世界ならば大丈夫じゃ。おぬしらの世界の平行世界として存在してある。」

「そういえば肉体年齢や転生後はどうなるのだ？元の体では転生できないのか？」

「大丈夫じゃ、元の体を基礎として再構築しそれを器として転生させる。その際に身体能力は多少強化されてしまうがのう。」

「そうか、その程度なら良いな。」

「確かに体が変わってしまうのは少し面倒だからな。身体能力が少し上がる程度なら問題ないだろ。」

「ふむ、それと謝罪の代わりと言ってはなんなのじゃが、幾つか能力をプレゼントしよう。死の危険性がおぬしらの世界よりも高いからのう。」

「ほう、良い心遣いだな（ニヤツ）」

桜花は黒い笑みを浮かべていた・・・

「（ゾクッ）ま、まあ当然じゃよ・・・（汗）」

「で、どんな能力をプレゼントしてくれるんだよ？選んでも良いのか？」

「うむ、選んで貰って大丈夫じゃよ。能力を幾つかピックアップして本にまとめてあるからそこから選んでくれ。」

神はそう言ってそこそこ分厚い本を何処から取り出し桜花に渡した。

「分かった。椿、選ぶぞ。」

「ああ。・・・所で幾つまで能力を選んで良いんだ？」

「おお、忘れておった。選べる数は5つまでじゃ。」

「5つか・・・多いな、能力にもよるが世界を壊す事が出来るのではないか？」

「まあ、それくらいが良いじゃろ？おぬしらならば間違ったことは使用しないだろうしのう。」

「ふうん、まあもらえる物は貰っとこうぜ。」

「そうだな、あつて困ることはないだろう。」

.....

「よし、俺はコレとアレにソレとコイツにコレだ。」

「私はコレとソレにアレとコレにコイツでいこう。」

桜花と椿はそれぞれ選んだ能力を神に告げた。

「何じゃおぬしら能力が二つ程能力がかぶつとるぞ？」

「ん？そうなのか？まあ相談してなかったからそういう事も有るんじゃないか？」

「まだ変更は聞くぞ？良いのかのう？」

「ああ、私はこの能力で問題ない。」

「おう、俺も問題ないぜ。」

「ならまあ良いかの。では能力を授ける。」

神がそう言って手をかざすと2人に光が伸びていき吸い込まれていった。

「「っ！！」」

「力が溢れてくる。」

「確かに、力が体の中から湧き上がってくるな。」

「ほほっ、すごいのおぬしら、流石にコレだけの能力を授けたら気絶位するはずなんじゃがのう。」

「まあ俺と桜花だしな・・・夜裂と蒼真の血を引くという事は伊達

じゃないんだよ……」

「……ふん……」

椿は少し苦笑いしながら言い、桜花も苦々しい顔をした。

「ふむ、先ほどはそんなに深いところまで覗いたわけでは無いので分からないのじゃが、何か在りそうじゃな……まあよいか。所で向こうで住む場所じゃが外からの転校生として学園都市の内部に入りこめるようにしよう。その学生寮に部屋を用意しておこう。」

「おう、悪い、ありがとうな。」（ニコッ）

「私からも感謝しよう。」（ニコッ）

桜花と椿は神に今まで見せていなかった優しい笑顔を見せた。

「ほっほっ、その笑顔が見えただけで十分じゃよ。それとコレはワシからの最後のプレゼントじゃ。受け取ってくれ。」

そう言って神はもう一度2人に手をかざした。

するとそれに呼応して2人の体から光が溢れ、それが段々と形を成していった。

「これはのう、おぬしらの魂のかけらから創られたおぬしら専用の『心神器』じゃ。おぬしらの心を映した鏡の様な武器でおぬしらが死なぬ限り決して壊れる事のないモノじゃ。」

神が説明を終えると光が収まり心神器が2人の前に姿を現した。

「これは・・・双刀と扇子が2本？」

椿の前に蒼の鞘に入った柄までも蒼の双刀が、桜花の前には透き通った白、純白の扇子が2本浮いていた。

「手にとって見なさい。」

そういわれ椿と桜花はそれぞれその手に双刀と扇子を取った。椿は双刀を二本とも鞘から引き抜いた、すると澄み渡った湖のような蒼の刀身が姿を現した。しかし良く見ると片方の刀身の根元、鏢の少し上辺りには赤い椿の花が、もう一本にはピンクの桜の花がそれぞれ彫られていた。桜花は扇子を開いてみる、扇子は白を通り越した透き通る様な純白でそこに淡いピンクの桜が舞っていた。持ち手の部分には純白の飾り紐がついておりその先に片方には桜の花の飾りが、もう片方には椿の花飾りがついていた。

「綺麗だ。(ね)・・・」

2人は少しの間、双刀と扇子に見入っていた。  
そこに神が声をかけた。

「2人ともその心神器に名前を付けてやりなさい。それはおぬしらの分身じゃからな。」

「……………」

「…………決めた。私の扇子は『輝桜』と『輝椿』よ。」

「俺の双刀は『蒼椿』と『蒼桜』だ。」

「ふむ、良い名じゃ。ではそろそろ転生先の世界へ行くとするかの？」

「ああ、そうだな。行くとするか。色々世話になったなジツちゃん。」

「うむ、世話になった感謝するおじい様。」

「……………(泣)……………」

「ど、どうしたんだよ!!ジツちゃん!!なんで泣いてんだよ!!」

「そうです、おじい様どうされたんですか?」

「…………ワシが誤って殺してしまったのにもかかわらず、ワシを許

してくれるのか？」

「当たり前だ。(よ。)」

「おじい様、事故で死んでしまったのは仕方が無いことです。(ニコツ)」

「そうだぜ、確かに最初はめちゃくちゃムカついたけどジツちゃん  
は俺たちに良くしてくれたし、当然だ(ニコツ！)」

「ありがとう・・・おぬしらが世界を渡っても見守っておるからの、  
気をつけて行って来なさい。」

笑いかける2人に対し神も本当の祖父の様な暖かいまなざしを向けていた。

「それじゃあ桜花、行くとするか。」

「そうだな椿、おじい様お願いします。」

「うむ分かった。でわ送るとしよう。」

神はそう言って手から光を出し扉を形成した。

「此処をくぐれば世界を渡ることが出来る。向こうへ着いたらまず  
学園都市の機関に連絡を取って転校の手続きをするのじゃ。向こう

での戸籍などは上手くやっておくから安心せい。それとおぬしらの選んだ能力ならば超能力も覚えられるからのう。上手くやりなさい。

「

「何から何までありがとうございます、おじい様。」

「サンキュ、ジツちゃん。」

そう言つて2人は扉をくぐつた。

「「行つてきます、ジツちゃん（おじい様）！！」

「行つてらっしゃい、2人とも。」

その言葉を最後に2人と扉は消えた。

静寂が支配する空間の中で、神は

「良い子達じゃ、それにワシが嘘をついておるのにも気づいておつた・・・あの子らに幸があらんことを・・・」

そう呟き光となり空間にしみこむように消えていった。



序章：弐「神との対面、そして異世界へ」（後書き）

駄文を最後までお読み頂きありがとうございます。

次話はやっと異世界です。

もう少々お待ち下さい。

第一章：1話「確認、そして学園都市へ」（前書き）

また駄文となつてしまった・・・orz

よろしくお願いします。

第一章：1話「確認、そして学園都市へ」

森の中に少年と少女が倒れている。

椿と桜花だ

「ツツ！！はっここは？桜花大丈夫か？」

椿が先に目を覚まし桜花を揺すって起した

「ん、んゝ椿か？ここはどこだ？頭がくらくらするな。」

「俺もだ、あゝ段々すつきりしてきたな・・・桜花はどうだ？」

「私も大分楽になってきた。」

「しかしここは何処だ？」

椿と桜花は立ち上がり辺りを見渡した。

「どこかの森のようだが分からんな・・・目印になるようなものが何も無い。」

「ふう、とりあえずまずは先に身体能力と貰った能力の確認をするか。」

「そうだな、そういえば椿はどんな能力を貰ったんだ？」

「俺か？俺は空間操作と聖眼各種、魔法創造、無限魔力、万物創造だな。桜花はどんな能力だ？」

「私の能力は無限魔力と魔法創造は椿と一緒にだ、他に事象操作、魔眼各種、万物破壊だ。」

「魔眼は大体聖眼と一緒にだから良いとして、事象操作と万物破壊がチートだな・・・」

「ふん、椿こそ万物創造と空間操作はチートだ・・・」

「ハア・・・」

なぜか2人そろってため息をついた。

「ちょっと調子に乗って能力を貰いすぎたかもな・・・」

「そうだな・・・流石にチート過ぎたか。」

「コレは一部の能力は封印をかけとくか。」

「そうだな、流石にコレは不味い。椿そうだったものは創造できるか？」

「やってみるか、タイプはどんなのがいい？」

「そうだな、ブレスレットでフィットするタイプが良いな。」

「ん、了解！じゃあやるとしますか！」

そう言って椿は目を閉じ手を両手を前へ突き出し集中し始めた。

「『クリエイト創造』！！！」

椿がそう言うと手の間に光が集まり薄いプレートを腕に巻きつけた様なタイプのブレスレットが2本現れた。

色は片方が蒼で赤い椿の花がワンポイントでついており、もう片方は輝く純白で全体的に桜の花びらをあしらってあるシンプルなものだった。

「はいよ、出来たぜ。付けてみるよ。」

椿はそう言って純白の方を桜花に差し出した。

「すまないな・・・所でコレはどう使うんだ？」

「付けて封じたい能力を念じれば良いだけだよ。はずせば直ぐに解

除も可能で、特定の能力だけを限定解除することも可能だ。」

「そうか、わかった。」

桜花はそう言ってブレスレットを付け目を閉じ念じた。

(全封印：『イビル・アイ魔眼』、『アカシック・コントロールアルトミック事象操作』、『インフイニティ・マジックパワー破壊』)  
一部封印：『無限魔力』)

そう念じると自分の中で何かが抑えられるのが感じられた。

「フム、しっかりと動作しているようだ。魔眼も発動しない。」

「そうか、それはよかったよ、んじゃ俺も抑えるか。」

そう言って椿もブレスレットを嵌め、念じた。

(全封印：『ホーリー・アイ聖眼』、『スペース・コントロール空間操作』、『クリエイト創造』)  
一部封印：『インフイニティ・マジックパワー無限魔力』)

「ん、完了だ。」

「ならばそろそろ移動するとするか。森を抜ければ都市に出るだろう。」

「つとその前に心神器をしまう物も作っておくか、流石に銃刀法違反だ。」

「そうだな私の輝桜と輝椿は良いとしても椿のは確かに危ない……ん？待てよ？確かおじい様は私達の魂のかけらといていた、ならば私達の魂の一部として再び体に取り込めるんじゃないか？」

「確かにそうだな……やってみるか。」

椿はそう言つと蒼椿と蒼桜を握り“戻れ”と念じた。すると蒼椿と蒼桜は光になり椿の体に吸い込まれていった。椿が隣を見ると桜花も同じようにしていた。

「よし、今度こそ出発だ。行こうぜ桜花。」

「ええ行くとするか椿。」

「「いざ！学園都市へ！」「」

**第一章：1話「確認、そして学園都市へ」（後書き）**

まだ学園都市に着かない・・・orz

頑張って次の話では付けるように頑張ります。

**間章：人物&能力紹介（前書き）**

とりあえず能力の設定と主人公達の紹介です。

## 間章：人物&能力紹介

名前：蒼真そうま 椿つばき

年齢：15歳

身長：175cm

体重：65kg

瞳：両目共にとても澄んだ蒼でいつもは半眼で眠そうにしている、聖眼発動時は瞳の色が変化する。

髪：全体は黒髪で前髪の一部に蒼いメッシュが入っている。髪型は男にしては少し長めのスーレート。

容姿：特上の上。普段は眠そうにしている、戦闘時にはしっかりと目を開き雰囲気もとても野生的になる。

性格：普段はいつでも飄々としており楽観的、他人の事を一番に考える為、戦闘などの理由は大抵は人の為。とても直観力に長けている。戦闘時はかなり凶暴になる。しかし、切れると逆に冷徹になる。

戦闘法：蒼真流古武術の使い手で普段は無手だが本気での戦闘時は双刀『蒼椿』『蒼桜』を使用した刀術を使用する。単純な接近戦ならば桜花より上で神裂を圧倒できる。

座右の銘：『平々凡々』

二つ名：静神しづかみ



## 能力解説

### ・空間操作 スペース・コントロール

解説：椿を中心に半径500メートルの球体型空間内を自由に操ることが出来る。その中には現象も含まれている。発動は先に空間操作能力を発動させ周囲の空間を掌握しなくてはならない。しかし一度発動したのなら解除するまでは能力空間内ならば思うまま。

制約：発動迄に1分の時間を要する。瞬間発動も可能だがその場合、能力解除後に全能力の封印と昏睡状態に強制的に移行する。昏睡期間は瞬間発動後の使用時間に比例する。（例えば1時間使用したら1週間、2時間ならば2週間といった物である。最低でも1時間は昏睡する。）

### ・無限魔力 インフイニティ・マジックパワー

解説：その名の通り枯渴することのない魔力。

### ・魔法創造 マジック・クリエイト

解説：ありとあらゆる魔法を創造できる。ただし死者を蘇らせるや生者を強制的に殺すなどは不可能。

### ・聖眼&魔眼 ホーリー・アイビル・アイ

解説：聖眼には透視の聖眼や遠視の聖眼、支配する聖眼等がある、魔眼には直死の魔眼や屈服の魔眼、石化の魔眼等がある。これらの眼を使用すると椿なら左、追うかは右の目の色が聖眼なら銀、魔眼なら金に変化する。



## 武術、心神器解説

### ・蒼真流古武術&夜裂流鼓舞術

解説：戦国時代より続く武術でありその蒼真流は対人戦を究極まで極めた戦闘術でありその動きは神速で直線的なもので、急所を狙う技が多い。夜裂流は鼓舞術の名の通り舞うように戦う戦闘術で対集団戦闘を極めたものである。その動きには優雅さがあり曲線的な動きで相手を翻弄する技が多い。蒼真、夜裂は共に仲が良くその子息などは良く結婚する。椿と桜花が居た世界の裏ではいわく蒼真と夜裂に手を出すなといわれている。

椿と桜花がまだ幼い頃ある組織が桜花を誘拐し椿を傷つけた、その際に椿と桜花の両親そして親族が桜花を助けたのだがその組織は関連する組織諸共、世界から消滅した。そして、警察がその事を捜査しようとした際、国から係わるなという圧力が掛かった。この事件があつてから裏の世界で蒼真と夜裂に敵対する組織は居なくなつたともされている。

### ・心神器『蒼椿』&『蒼桜』

解説：鐔、柄、刀身の全てが澄んだ蒼をしている双刀、刀身の根元付近にそれぞれ赤い椿とピンクの桜が彫られている。

### ・心神器『輝桜』『輝椿』

解説：持ち手、骨、扇面、要、飾り紐の全てが純白の双扇子、扇面には薄い桜の花びらが散っている。飾り紐の先には赤い椿とピンクの桜の飾りがついている。素材は扇面が布の様な素材だが破れる事は無い、骨は金属製。

心神器は魂の欠片である為その素材は不明である。

能力：基礎能力として形状変化、形態変化、身体能力強化がある。  
そして固有能力も有しているが椿も桜花も目覚めていない為、不明

## 間章：人物&能力紹介（後書き）

こんな感じで進めて行きます。

お次はやつと学園都市に到着です。

高校は上条と同じでクラスも同じにする予定です。

ちなみに2人の誕生日は書き忘れましたが椿が2月1日で桜花が1月2日です。

第一章・2話「到着そして・・・邂逅」(前書き)

やっと学園都市に到着します。

## 第一章：2話「到着そして・・・邂逅」

「さて、人里に着いたか。腹減ったし何か食うか、桜花財布はあるか？」

「ああポケットに入っていたからな。お金も入っていたぞ。それにこんな手紙もあった入ってた。」

“桜花、椿この手紙を読んでいるという事は無事に世界を渡れたという事じゃな。ちなみに現在はインデックスと上条の出会い前の年の3月じゃ今からなら4月に上条が入学すると同時におぬしらも入学できるじゃろ。それと、おぬしらで困らない様に多少の金と銀行にもお金を少々入れておいた。生活にはそれを使ってくれ。後のう、心神器は念じる事で体の中にしまう事が出来るからやってみとくれ。では、幸せな生活を送ってくれよ、ワシの愛しい孫達よ。by 神”

「たく念じて仕舞えるって、先に言ってくれよ・・・遅いって」

「全くおじい様は仕様のない方だな。」

2人はそうばやいたがその顔はとても優しげだった。

「そういえばジツちゃんは幾らくらい財布に入れといてくれたんだ？」

そうやって椿は自分の財布も取り出し、桜花も財布の中身を確認しだした。

「桜花、幾ら入ってた？俺は5万程だな。」

「私もそれくらいだ。ただ問題は通帳だな・・・見てくれ椿、おじ様は何を考えておられるのだ・・・」

桜花はそうやって財布の中に入っていた通帳を開き椿に差し出した。そこには・・・

「・・・桜花・・・俺の目がおかしいのか？・・・0が大量に見える・・・そして、コレ何処の銀行のだよ・・・」

「イヤ、私にも大量に見えるから椿の目はおかしくないよ・・・ちなみに私にはスイス銀行のプライベートバンクのものに見える・・・実家にいた時、お母様の通帳が確か一緒の物だったはずだ。」

「ああ、おばさんなら確かにスイス銀行に通帳くらい持ってそうだな。つか、コレ幾らだよ？ええつと？一、十、百、千、万・・・千万、一億って一億円も入ってんじゃねえか！マジで何考えてんだジツちゃんは！..!」

「違うぞ椿、円では無いアメリカのスイス銀行加盟店の物なのでドルだ。つまりコレは一億ドル、日本円で約百億だ」

「ははっ・・・百億ってどうやって使えってんだよそんなに・・・」

「確かにこんなに在っては使い辛いな・・・学園都市の銀行に新しく口座を作ってそちらに幾らか移して置くか。」

「そうだな。てか、お金の管理は桜花に任せるよ。俺がやるより確実だろうしな。」

「分かった、やっておこう、変わりに学園都市への転入手続きは頼むぞ?」

「ああ、任せろ!」

「よし、これからの事も決まったことだ、行動を開始するか。」

「おう!行くか!」

そう言って椿と桜花は街を歩いていった・・・

ぐううううう

「・・・その前に・・・」

きゅうううう



「私は、御坂とでも友達になっておくか。後々超電磁砲の方も関与したいしな。」

「よし、じゃあ行くか。」

「ああ、行くう。」

2人はそう言って学園都市へ入っていった。

「まずは部屋へ行くか。」

「そうだな、家具も今日届く予定だしな。」

「所で部屋は何処に借りたのだ？」

「第五学区の学生寮の近く、つまり上条の家近くにあるマンションの一室だ。」

「・・・良くそんな所に部屋を見付けられたな・・・あれか、いつもの椿の感か？」

「おう、なんとなく入った不動産屋にあった。んで、その店長に今度入る学生だって言ったら安くしてくれた。」

「・・・いつもながらどんな感だそれは・・・」

桜花は額に手を当て疲れた様に呟いた。

「ははっ、なんとなく分かつちまうもんは仕方ないさ!!」

「まあ、それで何度も助かったことがあるから何も言つまい。」

2人はそんな話を話しながら進んでいると前から1人の少年が複数の少年に追われながら走ってきた。

「ハアハア、そこの2人どいてくれー!!」

「!?!」

2人は反射的にその場を飛びのいた少年はその間を走って通りすぎ、その後を数人の少年達か

「待てこの野郎ー!!」

と叫びながら追いかけていった。

「なあ、今のって・・・」

「ああ間違いないな・・・」

「上条 当麻!!」

「原作通りにホントに不良に追いかけてるぜ?」

「生で見るとやはり面白いものだな。」

「どうする?」

「もちろん」

「追いかける!!」

そう言つて2人はすぐさま追いかけた。

最も2人の身体能力からしたら直ぐに追いついた。

そこは表通りから少し入った裏路地で当麻は行き止まりに追い詰められているようだった。

「さあもう逃げられねえぜ?」

「はあはあ、フン、もう逃げねえよ!!」

そう当麻は言ったが内心では

(1人だけ殴つてその後そこから逃げれば何とかなるかな?)

とか考えていた。  
すると痺れを切らした少年が

「覚悟しやがれ!!」

と叫び拳を振りかざしながら迫ってきた、だが

ドスッ!!

「うぐっ!!」

少年達の間を走ってきた椿の拳によって防がれた。

「お前ら1人を集団で囲むってのは感心しねえなあ?」

「そうだな、一対多は私も好きでは無いな。」

「「「っ?!?」」」

少年達は現れた椿と桜花を見て言葉を失った。

来て居るものこそ普通の学生服だが来て居る人物達がこの世の物とは思えぬ程に美しかったのだ、素晴らしい芸術を前に人は言葉を失うそれと同様である。

「お前ら、なんだよ？そいつに關係あんのか？關係ねえんだったらすっこんでろ！！」

「イヤ、關係ないんだけどねえ、見過ごせねえんだよこつゆつの。」

「ちっ！だつたらためえら！こいつらも一緒にやっちまえ！」

「」「」「おう！」「」

「くつくつくつ、イイねえこつゆつの久しぶりだ、楽しませてくれよっ？？」

椿は楽しそうにそう言って構えた。

両手をだらりと垂らし少し俯いたとても喧嘩する構えには見えない。だがその瞳は凶悪につり上がっておりその姿は正に獣の様に見えた。

「お、おい！コイツ、ヤバイって！逃げようぜ？」

「ああん？オイオイなんだよ？ココまで来て逃げるのかよ？そんな事いわねえで俺と遊ぼうぜ？楽しもうぜ？（ニタァ）」

「ヒ、ヒィ、、」

1人の少年が逃げだしたすると

「待てよお!!」

椿がそう言いながら追いかけてようとしたが

「椿、やめろ、逃げるものは追うな。私達の流儀に反するぞ?」

桜花がそう言っでとめた。

「・・・ワリイ、桜花助かった。」

そう言っで椿は俯いていた顔を上げ振り向いた。そこにはいつも通り少し眠そうだが優しい顔をした椿が居た。

「最近、喧嘩とか無かったから少し抑えられなかったみたいだ。」

「相変わらず椿は戦闘狂だな。また明日にでも組み手をしてやるそれでは我慢しておけ。」

「そうだな、ワリイな桜花じゃあ明日は頼んだ。」

そう2人が話していると

「あのお、すみません。あなた方はどちらさままで？というか助けて頂きありがとうございます！ハイ。」

何故か微妙に緊張しながら当麻が話しかけてきた。

「ん？ああ気にするな、私達が気に入らなかつただけだ。それと自己紹介していなかったな、私は『夜裂 桜花』それから」

「俺は『蒼真 椿』だ。よろしくな！！」

「あつ俺っじゃなくて私は『上条 当麻』といますです。ハイ。」

「当麻かあ。てか、何でお前そんなに緊張してんだ？」

「それは椿のせいだろ？あんなもの見たら流石に緊張するんじゃないか？」

「あ、そっか。悪かつたな当麻。俺はこっちが素だからそんな緊張するなよ。それと同じ年位だろ？だから敬語も無しで良いぜ！」

「そうだな、私にも敬語は要らない。私の敬語は癖だから気にしないでくれ。」

「はあ、じゃあ敬語は無しで。とりあえずもう一度言っとくわ、ありがとうな助けてくれて。」

「だから気にすんなって。俺らが好きでやった事だしよ。」

「そつだ、気にする必要は無い。」

「でも、お礼だけはちゃんと言わないとな。ところであんたら位の容姿なら学園都市で有名になりそうなもんだけど、聞いたこと無いよな？外の人間か？」

「ん？ああ来月からこちらの高校に入学するから引越してきて、つい先ほど到着したばかりなのだ。」

「へえ、そうなんだ。ここは広いから大変だぜ？案内しようか？」

「おっじゃあ頼んでいいか？」

「おう、任せ時なつて！場所は何処なんだ？」

「場所は第五学区の学生寮の近くのマンションだぜ。分かるか？」

「おお！分かるも何も俺の家の近くじゃねえか！奇遇だな！！」

「おっ！そうなのか！ホント奇遇だな！！」

（白々しいな椿、当麻の家が近いからココを選んだくせに）

（そつ言つなつて、だって知ってたらおかしいだろ？）

桜花と椿はアイコンタクトでそんな事を話していた。

「てか、やべえ！そろそろ終電だ！！椿！桜花！少し急ぐぞ！終電

がなくなっちゃまう!」

「そうなのか!んじゃ走るか!」

「そうだな。」

そう言って3人はバス停まで走って行った。

第一章：2話「到着そして・・・邂逅」(後書き)

あんまり進んでないですね・・・

次回更新も頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6704j/>

---

俺と彼女の異世界放浪記

2010年10月8日11時25分発行